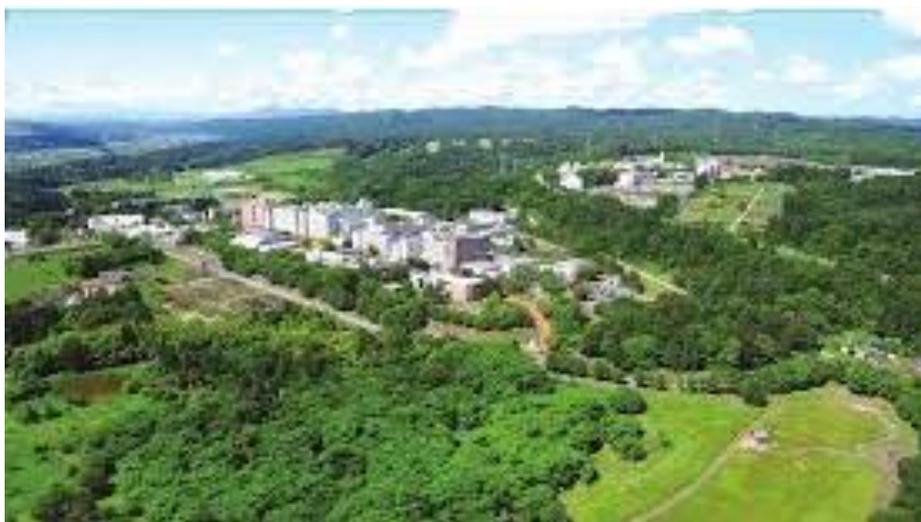


## 長岡技科大学学生対話会 2022 報告書(全体)

SNW世話役・報告書取り纏め 早瀬佑一



長岡技術科学大学全景

本報告書の構成(目次)	ページ
まえがき	1
1. 対話会の概要	2
2. 対話会の詳細	3
3. 参加シニアの感想	6
4. アンケート集計結果	10
5. 別添資料リスト	11

### まえがき

- ・対話会は、コロナ禍の影響で、2020、2021年の2年間中断されていたが、システム安全工学の大塚雄市教授から鈴木達也教授にバトンタッチするとともに、3年ぶりに再開した。
- ・鈴木教授の強いご指導により、教授の講座(核燃料サイクル)に登録している学生を中心とする、放射性廃棄物最終処分を軸とした対話会となった。シニア側も、廃棄物の専門家の参加でこれに応えた。
- ・基調講演「高レベル放射性廃棄物の処分はどうすべきか、どうするのがよいか」はシニア田辺博三氏が担当したが、海外からの留学生が参加することから、英語バージョンも用意する異色の対話会であった。
- ・大学でコロナ感染者が発生し開催が危ぶまれたが、鈴木教授のご尽力により、開催に漕ぎ着けられたことは、感謝したい。

## 1.対話会の概要

### 1)日時

・2022年12月2日(金) 8:50~12:20(対面)

### 2)場所

・長岡技術科学大学・原子力安全・システム安全棟、新潟県長岡市上富岡町 1603-1

### 3)参加者

・教員:鈴木達也教授(大学院工学研究科修士課程 原子力システム安全工学専攻 (副専攻長)安全技術講座)

・学生(18名):機械工学、電気電子情報工学、物質生物工学、原子力総合工学M1。  
内留学生4名(中国、ヨルダン)。

・SNWシニア(9名)

SNW東北:本田一明、高橋實、馬場礎

SNW東京:田辺博三、坪谷隆夫、岡本弘信、武田精悦、大野崇、早瀬佑一

### 4)基調講演概要

・テーマ:「高レベル放射性廃棄物の処分はどうか、どうするのがよいか」(英語、田辺博三)

・概要:高レベル放射性廃棄物については多くの課題があり、様々な検討が進められている。主要な課題である安全性と、安全性以外の課題に分けて紹介。

1. 地層処分の主たる技術的課題は地質調査、処分場設計・建設・操業・閉鎖、操業中安全性、閉鎖後長期安全性であること、NUMOの「包括的技術報告書」で詳細に検討しまとめられている。また、参考情報として、放射性廃棄物の発生、陸地処分における放射性廃棄物の分類と処分方法(IAEA)、陸地処分の安全戦略は閉じ込めと隔離、などについて説明。

2. その他の課題では、国、NUMOが実施している全国対話活動や文献調査活動などは除き、サイト選定、多重安全機能、処分場閉鎖後の制度的管理、可逆性・回収可能性、分離・変換技術の導入と処分への効果、規制制度、不確実性、廃棄物管理のための廃棄物の比較指標、廃棄物最小化の原則、処分資金確保、処分オプション、諸外国の状況について簡潔に紹介。

最後に、日頃、学生の皆さんが関心を持つ課題について、まず関連情報を収集すること、読んで内容を理解すること、出来れば同僚と意見交換すること、そして自身の意見を述べられるようになり真の知識となることを期待したい。

### 5)対話会概要

・対話方式:4班(各班学生4~5人、シニア2~3名)、学生がファシリテーターを務めた。

・対話テーマ:「高レベル放射性廃棄物の処分はどうか、どうするのがよいか」

・各班対話テーマ:鈴木教授が示した下記2テーマから、学生が選択した。

(1)直接処分、再処理処分、再処理+分離・変換処分方法のどれが良いか

(2)地層処分後の管理はどうか

・参加学生は、鈴木教授講座「核燃料サイクル工学」登録学生(25名)であり、放射性

廃棄物の基礎知識は十分、問題意識も高い。対話テーマ(1または2)はその場で決めた。シニア側も、各班に1名ずつ廃棄物分野の専門家を配置し、深掘した対話が出来た。

- ・鈴木先生は、学生に再処理、地層処分を単に技術の問題だけでなく、社会的影響も含めて幅広く考える場として対話会を活用したい意向であった。
- ・参加は、登録学生の自身の判断に任せた。最終的に18名が参加し、参加率が高く安堵した。
- ・留学生との対話は英語が主。日本語は使えない。他の学生とシニアによる通訳で、会話には苦労した。

## 2.対話会の詳細

### (1)開会挨拶(鈴木達也教授)

- ・原子力の利活用を進めるうえで、放射性廃棄物について様々な課題、問題が提起される。学生諸君は、大学の講義や対話会基調講演(事前に配布済)から多くを学んでいるが、今日の対話会において、学生同士の対話もさることながら、シニア専門家の知識、考え、経験のアドバイスを得ながら、日頃から考えている自分の意見、考え、疑問を深めてもらいたい。
- ・対話会のテーマは「高レベル放射性廃棄物の処分はどうすべきか、どうするのがよいか」としたが、各班での対話は、さらに突っ込んで、下記2テーマから、学生諸君が選択してほしい。廃棄物以外の課題、疑問にも、シニアは的確に応じてくれるので、積極的にぶつかってほしい。

(1)再処理せずそのまま廃棄体として処分するほうが良いか、使用済燃料は再処理してガラス固化体にして処分するほうが良いか、あるいは再処理だけでなく分離・変換まで実施した方が良いか。この三つの方法から一つを選び、廃棄物管理・経済性・市民の受容性等の観点から理由を説明してください。

(2)高レベル放射性廃棄物は地層処分される。地層処分は、そもそも管理しなくても良い処分方法ではあるが、近年管理を求める意見がある。管理をするとして、いつまで管理すべきで、どのように管理をすべきか。

### (2)対話会の進め方

08:50~08:55(5分) 挨拶(鈴木教授)、SNWシニア自己紹介

08:55~09:35(40分) 基調講演(田辺博三、英語+通訳なし)

09:35~09:45(10分) 休憩

09:45~11:45(120分)対話実施

11:45~12:00(15分) 班別対話まとめ資料作成(PPT)

12:00~12:20(20分) まとめ資料発表(発表3分、質疑応答2分×4班)

### (3)第1班

#### 1)対話参加者

- ・学生:量子・原子力統合工学分野 M1 男子4名(うち1名は中国人留学生)、電気電子情報工学分野 M1 男子1名
- ・シニア:(SNW)田辺博三、早瀬佑一  
(SNW 東北)馬場礎

## 2) 主な対話内容

- ・鈴木先生から提示された二つのテーマのうち、A 使用済核燃料の直接処分、B 再処理してガラス固化体処分、C 再処理して更に分離・変換してガラス固化体処分の3つの方法について、「廃棄物管理」、「経済性」、「市民の受容性」の観点から1つを選択することとし、学生同士の議論、シニアとの対話を行った。
- ・学生の処分方法の選択は以下の通り。
  - ・「廃棄物管理」の観点からは、4人がCを支持
  - ・「経済性」の観点からは 4人がA、1人がBを支持
  - ・「市民の受容性」からは 3人がC、2人がBを支持
  - ・総合評価は 3人がC、2人がBとなった。
- ・学生の判断は深い学習の結果としての判断とまで行かず、直感的、感動的な面もあったと思われる。
- ・総合評価は市民の受容性が支配的であり、「市民の受容性」が高いのはCであることから、分離・変換技術の実現性がポイントとなると整理された。
- ・市民に受け入れられるかどうかは処分とその後の管理の安全性が重要であると認識された。

## (4) 第2班

### 1) 参加者

- ・学生:5名(大学院工学研究科 機械工学分野 M1 1名、大学院工学研究科電気電子情報工学分野 M1 2名、大学院工学研究科 量子・原子力統合工学分野 M1 2名)
- ・シニア:岡本弘信、本田一明

### 2) 主な対話内容

- ・テーマ:鈴木先生から提示された2つのディスカッションテーマのうち、「(2)高レベル放射性廃棄物は地層処分される。地層処分はそもそも管理しなくてもよい処分方法ではあるが、近年管理を求める意見がある。管理をすることで、いつまで管理をすべきで、どのように管理をすべきか。」を選択。
- ・対話に先立って、シニア、学生諸君の簡単な自己紹介を行った。2名は留学生でそのうち1名はヨルダン出身の女性、もう1名は中国出身であった。
- ・ファシリテータは学生が務め、まずはテーマの趣旨を確認することから始めた。
- ・主な対話項目は以下のとおりであり、シニアからの随所に経験を交えた解説に対し深掘りする追加質問、話題を広げる質問が出るなど話題豊富な内容となった。

#### ① 現状認識

地層処分を行う対象高レベル廃棄物(日本は再処理したガラス固化体、海外は使用済み燃料を直接処分)、生活環境から隔離するための人工バリア(ガラス固化体、キャニスター、オーバーパック、ベントナイト)と天然バリア(地下300m以

深の岩盤)で長期間にわたり人間の生活環境から隔離、地層処分場のイメージ(地下施設の規模6~10km<sup>2</sup>、ガラス固化体4万本)、処分場の安全確保の考え方(火山、活断層、隆起・浸食)と科学的特性マップ作製に考慮された要素(加えて鉱山資源)、海外の地層処分計画の取組み状況、北海道2町村での文献調査など

## ② ディスカッション

R&R(可逆性・回収可能性)、処分場閉鎖後の制度管理、核変換と分離技術、人間の生活環境からの隔離年数に関連してガラス固化体製造時からの放射能の減衰(Cs、Sr等の核分裂生成物、Cm、Am等のアクチノイド核種)、被ばく評価結果(国際基準である年間300 $\mu$ Svに対して2 $\mu$ Sv)、地層環境変化のモニタリングなど

- ・これらの対話の結果を上手く纏め、グループ発表して頂いた。シニアの体験談を交えた高レベル廃棄物に関する話を通じ、埋設処分を更に身近なものと感じ、より自分事として考えて頂き良い機会になったものと感じる。

## (5) 第3班

1)参加者:学生4名、全員大学院工学研究科 M1 (電気電子情報工学分野2、物質生物工学分野1、量子・原子力統合工学分野1)

シニア:武田精悦、高橋實

### 2) 主な対話内容

- ・先生は、2つのテーマを示されたが、両方とも内容が入り組んでおり、2つのテーマ全体を対象に対話が進められた。主な意見は以下の通り。
- ・人間が管理しなくても済むように地下に埋めるのは理解できるが、将来の新しい知見に対応できるように、回収可能とすべきである。
- ・ロケットで太陽に打ち込む等がコスト的にリーズナブルになったら、少なくともそれ以降に発生した HLW は宇宙に打ち上げるのが良い。(シニアから、地球圏内の廃棄物を地球圏外に排出することについて異論があることが紹介された。)
- ・学生の質問に答え、シニアから、各国の HLW 処分の動向、技術的安全性、日本の HLW 量や貯蔵状況について説明した。
- ・シニアの説明を聞き、技術的には、安全性は、理解できるとの発言があった。ただ、地元の住民からの同意は簡単では無いと思うとの発言があり、自分の地元で誘致の話が来たら、どう判断するか分からないとのこと。
- ・シニアから、NUMO の活動、寿都町、神恵内村の状況を説明した。
- ・学生より処分地の議論を進めるためには、以下のような議論を進めるべきとの意見。
- ・メリット(金=地域振興策=地元雇用等)を分かりやすく説明する。
- ・若い人へのインフルエンサーとの対談を若い人が聞きやすい形で広める。聞いた人の何%かは理解を示すだろう。今の学生は、テレビは持っていない人が多いし、新聞は取っていない。外の情報は、スマホとパソコンである。
- ・次世代への教育をしっかりやるべき。

- ・第3班の4人に関しては、福島事故は10年以上前の出来事であり、廃棄物処分を考える上で、トラウマにはなっていないとの発言があった。(確認しなかったが、福島出身の人はいなかったか?)
- ・以上、安全性については、地震、断層、地下水等、きちんと解析評価しているとの印象を持った人が多いと思うが、そういった学生も地元への誘致はためらうとの意見は重い。

#### (6) 第4班

1) 参加者: 学生4名、機械工学分野1名、電気電子情報工学分野2名、原子力統合工学分野1名  
シニア: 坪谷隆也、大野崇

#### 2) 主な対話内容

- ・ディスカッション2テーマのうち、「高レベル放射性廃棄物は地層処分される。地層処分はそもそも管理しなくてもよい処分方法であるが、近年管理を求める意見がある。管理をすゝるとして、いつまで管理をすゝべきか、どのように管理をすゝべきか。」が選定され、学生間で議論する形で進められた。シニアは適宜情報提供と、アドバイスをを行った。
- ・議論は、「地層処分について管理(control)の期間」をどう考えるのかを中心になされ、「管理をすゝるとしてその程度の期間を考えればよいか、その後は何を心配してモニタリングすればよいか、その期間は」を中心に議論が展開された。結果、孫の世代までの安全保障期間として取り出し期間は100年、その後も150年までは、埋設廃棄物の地下水、地層、地上への影響を考慮したモニタリングが必要であることを議論の結論としてまとめ報告がなされた。
- ・議論の途中、鈴木先生から、工学の目的は社会に受け入れられる技術を目指すことにあり、埋設技術だけでなく、住民を含めた社会的安全も考慮することが求められるというアドバイスがなされた。

#### (7) 講評、閉会挨拶

- ・対話に出来る限りの時間をとったため、講評、閉会挨拶は割愛した。

### 3. 参加シニアの感想

#### 【田辺博三・第1班】

- ・対話グループ1には電気電子情報工学分野M1学生1名、量子・原子力統合工学分野M1学生4名(うち1名は中国からの留学生)が参加しました。
- ・まず最初に、ファシリテータと対話結果の発表を担当する学生と、対話結果をとりまとめる学生が選ばれました。次いで、学生間の話し合いで、世話役の先生から提案された2テーマのうち、(1)再処理せずそのまま廃棄体として処分する方が良いか、使用済燃料は再処理してガラス固化体にして処分する方が良いか、あるいは再処理だけでなく分離・変換まで実施した方が良いか。この三つの方法から一つを

選び、廃棄物管理・経済性・市民の受容性等の観点から理由を説明してください、が選ばれました。

- ・対話では、実用化スケジュールの観点をどう判断するのが良いか、比較する観点として、安全性を加えるべきではないか、経済性は処分だけ考えるのかあるいは再処理や分離・変換のコストも含めた発電コストで評価するのか等が整理されたうえで、対話開始時点の各学生の直感的な比較評価が行われ、再処理を2名、再処理＋分離・変換を3名が選びました。直接処分を選ぶ学生はいませんでした。その後、シニアの意見も踏まえて、学生間で三つの方法のメリット、デメリットが議論され整理されました。
- ・直接処分、再処理や分離・変換後の処分、アメリカが再処理をやめて直接処分に変更した政策変更、分離・変換によって処分にどのような効果が与えられるかなど、まだ学んで欲しいことがたくさんありますが、今回の対話や基調講演の情報を踏まえて、関連情報を学び、自らの意見とそのエビデンスを充実させていただきたいと思います。

#### 【馬場礎・第1班】

- ・コロナの第8波で、新潟県は感染者発生数が高い水準にあるにもかかわらず、参加学生は25名のエントリー中、18名が参加した。これは、先生の指導と学生の関心が高かったのだと思う。
- ・コロナ禍で2年、対話会は中断していたが、その前の2～3回は対話テーマが「原子力事故と豪雪の複合災害における住民避難」であった。今回は純技術的テーマであり学生も対話に関心が高かったと思う。
- ・第1班の議論において、使用済核燃料の処分方式の選択について、{市民の受容性}が大きなウエートを占めていたが、科学技術、工学を学んでいる学生の現在の立場では、そちらにウエートをおいても良いのではと感じた。
- ・受容性は即ち安全性に密接しているので、技術的安全性からの考察も大事と思う。

#### 【早瀬佑一・第1班】

- ・第1班は、量子・原子力統合工学の学生4名(M1)と電気電子情報工学の学生1名(M1)とシニア3名の計8名でした。学生の1名は中国からの留学生でした。
- ・対話テーマは、鈴木先生から示された2案の中から、「使用済燃料直接処分」、「再処理ガラス固化体処分」、「再処理＋P&Tガラス固化体処分」の3方法について、安全性、管理方法、経済性、市民受容性の観点から議論しました。学生が各自意見、疑問、質問を述べ、必要に応じてシニアが情報提供、アドバイスしました。
- ・市民受容性が最後の鍵である、その点で「再処理＋P&T」が望ましいとの意見が強かった。現状技術未確立の「P&T」の開発を急ぐべきである点で一致しました。
- ・参加した留学生とは英語によるコミュニケーションでしたが、他の学生もシニアも相互対話に苦労しました。技大は留学生が多いので、今後の対話会に何らかの工夫が必要ではないかと感じました。

- ・小生は世話役が初めてでしたが、コロナ騒動の中、鈴木先生の適切なご指導のおかげで、充実した対話会が実施できました。あらためてお礼を申し上げます。

#### 【岡本弘信・第2班】

- ・テーマ(2)を選んで、高レベル廃棄物処分体を処分場に運び込んでから、いつまで管理すべきで、どのように管理するべきかについて意見交換を開始した。
- ・採用した地層処分システムおよび地層環境の経時変化を把握しながら、いつかの時点でこれで大丈夫と判断することになろう、何か変わった事象を認めた時には、そこで立ち止まって考えることになろう、処分場を稼働している間でも、別の手立てを準備して処分システムのグレードアップを図ることもありうるなど、意見交換をすることができた。地層環境は国ごとに特徴があり、その特徴を良く調べて、火山、断層、隆起、地滑り、資源鉱脈などを避けて、人間環境からの隔離性能を捉えて、人口バリアによる閉じ込め性能と合わせて、処分システムの安全評価に反映することになるなど、前向きに理解をしている学生の様子を伺うことができた。
- ・幌延などの処分試験坑道を見学したことがないようなので早いうちに見るとよいと勧めるとともに、北海道での文献調査で対話の場の資料や議事録がNUMOのHPにあるので住民の方々の対応ぶりをフォローして、地層処分計画の理解を深めて欲しいことも伝えることができた。留学生も日本の取組みの状況や地層処分計画の課題の一端を、英語の基調講演に続く対話の場で結構把握できたのではと思った。

#### 【本田一明・第2班】

- ・学内で新型コロナウイルスが広がっているとのことから対面での開催が危ぶまれたが、鈴木先生、世話役の対応で何とか開催出来た。お二人のご尽力に感謝。
- ・とはいうものの、ゼミはオンラインに移行しており、教室での対面参加は何人出席するか分からないとのことに加えて、当初対話開始前の学生さんの参集状況があまり芳しくはなく心許なかったが、最終的には18名の参加となり安堵した。
- ・第2班は、参加学生5名中2名が留学生で、うち1名はヨルダンからの女性、もう1名は中国から。両名とも今年入学とのこともあり、日本人学生が留学生に内容の理解を確認し教えてくれていた。国際色豊かな中での授業、学生生活は他国の考え方、文化を学ぶことが出来、良い学習環境のなかで学生生活を送っていると感じた。
- ・対話はシニアの時折拙い英語を交えての説明で、どこまで理解頂けたかは若干不安。また、テーマがやや専門的であることから、課題の意図の把握のために高レベル廃棄物の現状把握に対話の時間を費やしたことは寧ろ良かったのではないかと感じる。学生の関心の高さ、熱意もあり、シニアからの随所に経験を交えた解説に対して深掘りする追加質問、話題を広げる質問が出るなど話題豊富な対話内容となった。体験談を交えた高レベル廃棄物に関する話を通じ、埋設処分を更に身近なものと感じ、より自分事として考えて頂き良い機会になったのではないかと感ずる。

#### 【武田精悦・第3班】

- ・グループ3に参加した。同グループのメンバーは M1 の大学院生 4 名である。講演の内容に加えシニアからの追加の説明によって、院生たちは地層処分の安全性や国内外の動向など地層処分の全体像をほぼ理解したように感じた。
- ・処分事業が約 100 年に及ぶ長期にわたる事業であることに関連し、あくまで地層処分という方法が現時点での最良の選択であること、今後出てくるかもしれない新しい技術に対応できるよう可逆性が保証されていること、その場合は残りの廃棄物は他の方法で処分される可能性があるのではないかとといったことなどが指摘され、地層処分技術を相対化してとらえようとする議論が注目された。
- ・インフルエンサーとの対談を YouTube で流し地層処分への理解を広めたらどうかといったアイデアや、福島での事故はあまり記憶になく原子力に対するトラウマは特にないといった発言に、他の会合などで聞かれる次世代に共通の特徴を感じた。若い人たちに期待したいと思うとともに、彼らに原子力・エネルギー問題に関する確かな情報を提供することの重要性を改めて感じた。

#### 【高橋實・第3班】

- ・私は、グループ3に参加した。コロナの影響を心配したが、学生諸君は、ほとんど気にしていないようにも見受けられ、予定通り開催できて良かった。
- ・グループ3の 4 人とも、高レベル廃棄物の処分については、特段の予備知識は持っていないように見受けられたが、シニアの説明で、超長期に及ぶ地震、地下水等を評価し、安全性についてはある程度納得したように感じられ、それ自体は有意義であったと思う。ただ、自分の地元への立地ということになると、難しいとの意見だった。若い人に人気のあるインフルエンサーとの対話を若い人が聞きやすい形で広めれば、若干なりとも理解者が増えるのではと強調していた学生が印象的だった。
- ・今の学生のほとんどは、テレビは持っていないし、新聞も取っていない。情報源はスマホ、パソコン、我々との時代の差を感じた。

#### 【坪谷隆夫・第4班】

- ・対話会参加学生 18 名が 4 班に分かれてグループ対話を実施しました。報告者の属した第 4 班 4 名の学生諸君は、電気工学、原子力工学、機械工学と異なるゼミの修士課程で鈴木先生の「核燃料サイクル工学」を履修しています。鈴木先生から与えられた主題案の中から「高レベル放射性廃棄物の管理」について選び、学生がそれぞれ意見を述べる中でシニア(大野氏及び報告者)がアドバイスをするようにしました。
- ・冒頭、「管理」を指す意味に人間が制御する概念の control とそれ以上に幅広い概念の management があることを頭に置いて置かないとコミュニケーションが取れにくいことを知ってもらいました。その上で、「地上管理」と「地下管理」のメリット・デメリットを話し合い、地下管理として地層処分について管理(control)の期間を話し合いました。話し合いの中で、埋設技術、モニタリング、記録保存、回収などについて理解を深めたようです。グループ対話の途中で工学の目的は社会に受け入れられる

技術を目指すもののご指導を鈴木先生がされていましたが、このような鈴木先生のお話は、生涯を通じて学生諸君の心に刻み込まれることを期待します。

- ・このようなグループ対話は、学生諸君はこれまであまり経験していないとのことでしたが、折しも新型コロナ禍の中の授業の一環としてこのような機会を学生諸君に与えられましたことに敬意を表します。

#### 【大野崇・第4班】

- ・第 8 波コロナ襲来の中で参加人員も定まらぬ中での開催であったが、世話役の早瀬氏と鈴木先生の並々ならぬご努力により、無事対面対話が開催された。鈴木先生も 16 名の学生の参加を得てほっとされていたご様子であった。
- ・今回は、留学生が多く、英語による基調講演が要求され、講師の田辺氏の能力の高さで無事終了したが、今後の対話会での新たな要求事項となろう。
- ・学生は、今回の対話会へは自主参加であったがこのような状況でも 16 名の学生が集まり鈴木先生の講座の人気の高さが伺えた。
- ・小生専門ではないが 4 班で坪谷氏と対応した。修士課程の学生のレベルは高く、皆、地層処分をよく勉強しており、そのうえで社会的ニーズとして地層処分管理に何が要求されどのくらいの期間を管理すべきかについて、坪谷氏の的確な説明の下、深堀の議論がなされ学生同士で結論をまとめ発表を行った。学生の、纏めとプレゼンテーション能力の高さに感心した。鈴木先生は、学生同士が議論する機会と、社会的視点から議論する機会の場合として本対話会を活用したいように感じた。来年度の開催も期待したい。

#### 4. アンケート集計結果(参加学生全員 18 名の回答)

- ・基調講演は、留学生 4 人に配慮し英語で行われた。遅刻して基調講演に間に合わなかった 3 人を除いて、「とても満足」(11 人)、「ある程度満足」(4 人)であり、参加者全員に満足頂けた。
- ・また、対話テーマは、鈴木先生から提示された高レベル放射性廃棄物の処分について深堀した難しいものであったが、学生の積極的な参加があり、「とても満足」(12 人)、「ある程度満足」(6 人)で、全員に満足頂けた。
- ・「学生とシニアの対話」の必要性については、「非常にある」(12 人)、「ややある」(4 人)と全員(1 名は回答なし)から評価頂いた。
- ・原子力発電について、「必要性を強く認識した」が 7 名、「必要性は分かっていたので、認識はあまり変わらず」が 12 名(註:複数回答あり)であり、ほぼ全員が必要性を認識していた。
- ・2050 年カーボンニュートラル(脱炭素)について、関心や興味が「大いにある」(11 人)、「少しはある」(7 人)と全員が関心を示すものの、友人同士で温暖化や脱炭素社会について「あまり話さない」(8 人)、「ほとんど話さない」(5 人)との回答であり、

話題にする機会は少ないようである。しかし、「大いに話す」(5人)方もおり、カーボンニュートラルも若者の中に浸透しつつあるようだ。

- ・対話会全体について、「貴重講演の内容やディスカッションが非常に有意義で、自分の知見を深める貴重な機会であった。折角なら一日を通した対話会になればいいなと思いました」など、全般的に好評であった。
- ・とはいうものの、1名から、事前に聴きたかったこと「あまり聞けなかった」との回答があった。ファシリテータを学生が努めたが、シニアからも参加者全への目配りが望まれる。
- ・アンケートで、原子力発電、カーボンニュートラル等、今回の対話会テーマに直接関係のない項目について、参加学生の率直な意見、見方が示されたのは、貴重な成果であった。
- ・アンケート詳細については別添資料を参照。

#### 5.別添資料リスト

- ・基調講演「高レベル放射性廃棄物の処分はどうすべきか、どうするのがよいか」
- ・アンケート結果詳細

(報告書作成:早瀬佑一 2022年12月17日)